



Title	技術報告：農場を去るにあたって
Author(s)	田村, 春人
Citation	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場技術業務報告, 8, 85-87
Issue Date	2008-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35011
Type	bulletin (article)
File Information	8_p85-87.pdf



[Instructions for use](#)

「農場を去るにあたって」

生物生産研究農場園芸グループ 田村 春人

私は昭和 43 年 4 月 1 日付けで当時の農学部付属農場園芸第 1 部に採用された。旧農場庁舎は現在の理学部 3 号館付近にあり、木造 2 階の建物で農場本部と呼ばれていた。場長室、事務長室、庶務係・会計系の事務室、教官室に割り振られ、技術職員の部屋は無くそれぞれが使っていた作業棟が私たちの出勤場所でした。13 部体制で運営され、農業実習部・作業管理部を除く 11 部が農学部の講座と直結していた。当時部主任を勤めていた教授は時代背景もあったと思うが、個性の強い人が多かった。北方生物圏フィールド科学センター後、農学部とは組織的に繋がりが消えたが旧講座の流れとグループについて第 1 表に示した。

(S43 年農学部付属農場)	(S43 年農学部)	(H20 年農学部)	
作物第 1 部(吉田 稔)	食用作物学講座(田口 啓作)	作物学研究室 (岩間 和人)	作物
作物第 2 部(細川 定治)	工芸作物学講座(細川 定治)	植物遺伝資源学研究室(喜多村啓介)	
育種部(高橋萬右衛門)	作物育種学講座(高橋萬右衛門)	植物育種学研究室(佐野 芳雄)	
農機具部 (岡村 俊民)	農業機械学講座(岡村 俊民)	作物生産システム工学研究室(片岡崇)	
(吉田 富穂)	農業原動機学講座(吉田 富穂)		G
農業実習部(喜多富美治)			
園芸第 1 部 (田村 勉)	果樹・蔬菜園芸学講座(田村勉)	園芸学研究室 (鈴木 正彦)	園
余市果樹園(吉田 竜夫)			
園芸第 2 部(奥村 実義)	花卉・造園学講座(明道 博)	花卉・緑地計画学研究室(近藤哲也)	芸
養蚕部 (滝沢 義郎)	蚕学講座 (滝沢 義郎)	応用分子昆虫学研究室(伴戸久徳)	
農産製造部(小幡弥太郎)	農産物利用学講座(小幡弥太郎)	生物有機化学研究室(鍋田 憲助)	G
作業管理部(高橋 直秀)			
第 1 畜産部(八戸 芳夫)	家畜育種学講座(八戸 芳夫)	家畜改良増殖学研究室(渡邊 智正)	畜産
第 2 畜産部(広瀬 可恒)	家畜飼養学講座 (広瀬 可恒)	畜牧体系学研究室(近藤 誠司)	
畜産製造部(安井 勉)	畜産食品製造学講座(安井 勉)	畜産食品開発学研究室(服部昭仁)	

第 1 表 昭和 43 年農学部付属農場組織図



第 1 図 私の出勤場所となった旧園芸作業棟

この建物は大昭時代に造られ、現在の実験実習棟が完成した平成 8 年まで使われた。長さ 4 間 (7.2m) の梁が何本も使われ非常に頑丈な建物でした。当時、技術職員 4 名、季節雇用職員 3 名が働いていた。一部は、官舎としても利用され職員の家族が暮らしていた。他部の技術職員とはめったに合うことがなく、なかなか名前を覚えることができなかった。

園芸第1部の作付け面積は昭和49年に下手稲通建設のため100a減り(他部へ放棄も含む)、200aとなったが昭和43年~昭和48年は300aと多かった(第2表)。

	S43	S46	S49	S51	S57	S59	H4	H6	H12	H19
果樹計	(100)	(84)	(80)	(85)	(88)	(88)	(88)	(41)	(84.1)	(112.4)
りんご	64	48	45	45	40	40	40	20	22.2	38.5
なし	30	30	30	30	40	40	40	10	16.4	16.4
小果樹	3	3	2	2	5	5	5	10	29	39.7
その他	3	3	3	8	3	3	3	1	16.5	17.8
果菜類計	(65)	(45)	(9)	(9)	(10)	(10)			(7.4)	(1.1)
かぼちゃ	20	16								
トマト	3	3	4	4	3	3				1.1
なす	3	1	2	2	3	3				
きゅうり	3	4	2	2	3	3			7.4	
ピーマン	1	1	1	1	1	1				
スイートコーン	35	20								
根菜類計	(40)	(47)	(30)	(26)	(20)	(15)	(6)		(1.5)	(1)
馬鈴薯	20	25	10	10						
だいこん	20	22	20	10	10	10	5			
ながいも				5	10	5	1		1.5	1
ゆり				1						
葉茎菜類計	(70)	(68)	(68)	(67)	(60)	(58)	(59.5)	(48.3)	(61.9)	(42.2)
きゃべつ	10	8							2	
はくさい	10	10	15	13	10	10	10			
セルリー			1	1	2	2	2	2	2.4	
ニンニク				1	1	1	2.8	1	1	0.9
ギョウジャニンニク							7.7	7	4.8	3.3
コジャク							2	3.3	5.6	
アスパラガス	50	50	52	52	47	45	35	35	46.1	37.9
エンパク(子実)	33	42								
エンパク(緑肥)		22		5	15	29	46.5	53.7	24.1	22.3
未整備(根抜後)								30		
作付け面積計	(308)	(308)	(187)	(192)	(193)	(200)	(200)	(173)	(179)	(179)

第2表 園芸第1部作付け面積の推移(単位a)

りんご64a、なし30a、かぼちゃ・スイートコーンを含む果菜類65a、馬鈴薯・だいこんの根菜類40a、アスパラガス50aを含む葉茎菜類70a等が作付けされていた。

平成5年、農学部世代短縮温室隣20aのりんご・栗と150本(30a)のなしを業者において処分した。りんご後地20aは作物グループへ、なし後地へは農学部作物生理・植物病理が実験圃場を求めて入ってきた。作物別にみると、馬鈴薯が昭和54年、はくさい・だいこんが平成4~5年まで生産用に作付けされていた。トマト・なす・きゅうり・ピーマンの果菜類10aは学生実習用に平成元年まで続き、整枝・誘引・防除等の管理作業と収穫に多大の労力を要した。

昭和63年にギョウジャニンニク、平成4年にコジャク・ハマボウフウ・ユキザサ等の山菜類が研究用に導入された。

平成19年、「きのとや」との共同研究が始まり小果樹栽培面積が40aと増えた

以下関わって来た主な作物についてのべる。

- ①、剪定となしの高接更新(第2図):りんご・なしの栽植本数が260本程と多く、いつも1月20頃より剪定作業に入った。園芸第1部事実上の仕事始めでその日は、全教職で「鉄入れ」儀式が行われた(作業の安全と豊作祈願)。

なし150本の中には果実が小さい・気候に合わない等食べられない品種も多く、当時の人気品種「ブランドー」をそれらの木に接木し品種更新を行った。

- ②、セルリー(第3図):昭和45年育苗用に建てられたガラス室での栽培が始まり、昭和49年には露地でも行われ、平成17年まで学生実習に用いられた。灌水試験や遮光資材比較試験等を行ってきた。

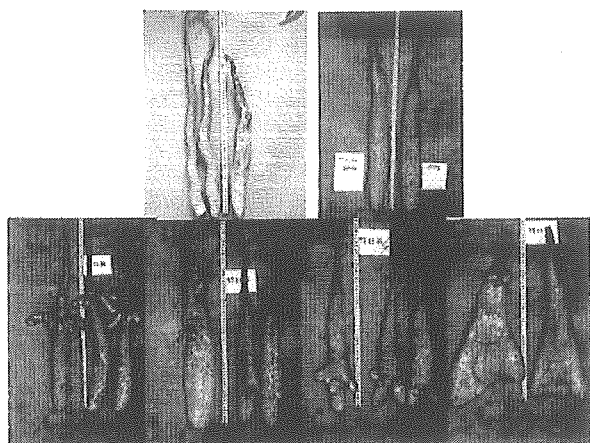


第2図 剪定と高接ぎ

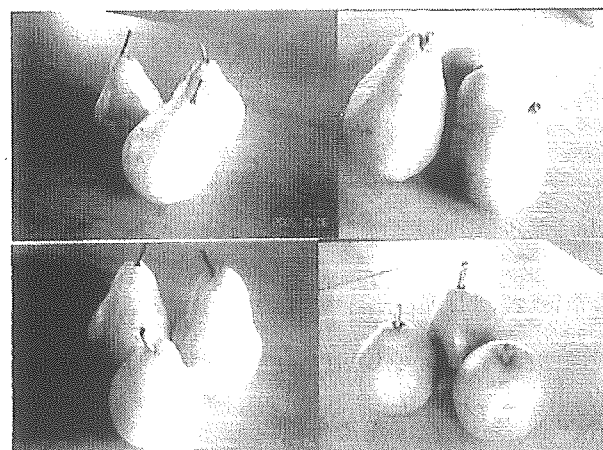


第3図 セルリー

- ③、ながいも（第4図）：雌雄異種であるが栽培されているながいもはほとんど雄株である。見つかった雌株は雄株に比べ自然芋に似て細長い形状で食用に使いにくい、育種素材として貴重な存在である。土壌条件により、肩や尻部の分岐・胴部のリング・尻部の扁平等の奇形が多く見られた。
- ④、洋梨（第5図）：味・香り・肉質に優れているオーロラ・マグネスの適食期をつかむため追熟過程における硬度・糖度・種子の色等について調査した。

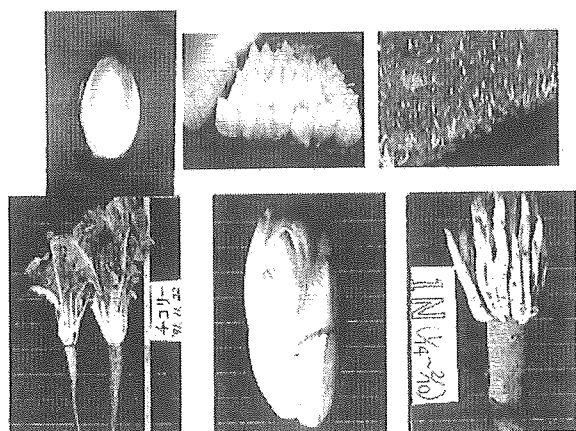


第4図 ながいも

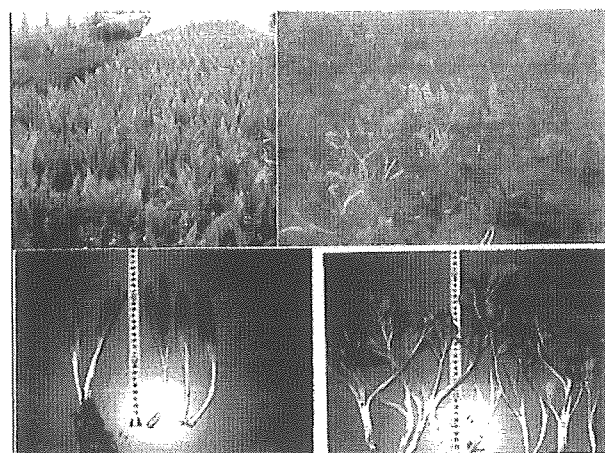


第5図 洋梨

- ⑤、チコリー（第6図）：キク科の植物でサクサクした歯ざわりとほろ苦さが特徴のおいしい野菜である。茎葉はタンポポに似、地下部にビートのような塊根が出来、それを土中に伏せ込むか、暗黒下で水耕栽培すると、はくさいに似た結球ができる。結球が大きいと葉柄が肉厚でおいしいが、奇形・腐敗の発生が多く生産効率を悪くするため通常は150g前後で収穫する。
- ⑥、山菜類の研究が昭和63年よりギョウジャンニクで始まり、その後ハマボウフウ・コジャク・ユキザサと増えて行った。（第7図）。



第6図 チコリー



第7図 ギョウジャンニクとハマボウフウ

- ⑦、その他、メロン・チンゲンサイ・ヤーコン・ルバーブ等の栽培も試みた。

農場には担当する部署により、休日勤務・生産活動・学生実習・研究実績等に差があります。技術職員全員が平等に負担を分かち合える組織ができないものかと、常に思っていました。十分な話し合いの場を設け、理解しあい協力できる体制になることを願っています。長い間たいへんお世話になりありがとうございました。